

山の御爺・中川金治と東京の水源地

稲場 紀久雄

出会い

ご紹介に預かりました稲場でございます。これから一時間ばかり、お耳を拝借したいと思えます。

今年は、東京都の水源地百周年に当たります。奥多摩までは皆さん、お行きになったと思います。

小河内ダムまでは東京都の領域なのです。ところが、水源地は、奥多摩の上流、山梨県側に広がっております。山梨県側では、丹波山村、小菅村、それから一番最上流が塩山市です。東京都の水源地は、全体の面積が約二一、六〇〇ヘクタール、日本一広大な水源地です。今日はこの山梨県側の、最上流の水源地のお話をさせていただきます。この源流域、百年前は、極端に言えば、裸の山に近

いと言つてもいいほど荒廃してしましました。この荒廃した森林を、今日のような立派な水源地にした人、それが、中川金治という人です。実は、私も十数年前まで、中川金治さんについては名前すら知らなかったのです。

水源地百年ということ、東京都の水源地管理事務所の人たちが色々とお話をなさっているのですが、そこで語られる話の中に中川金治という人のことは全くと言っていいほど出てきません。大体、水源地ということになると、まず憲政の神様と言われた尾崎行雄さんが基礎を作ったのだ、あるいは一番最初に、本当の意味で水源地の基礎を作ったのは、当時の知事の千家さん——この人は

出雲大社の宮司だった人です——だとか、日本で初めて林学博士になった本多静六さんと言った名前は、よく出てくるのです。ところが中川金治という名前は出てこない。忘れられた人ですが、この人こそ縁の下の力持ちとして水源林を本当に作り上げた人なのです。

大菩薩峠の西側に柳沢峠があります。塩山駅を降りて、この柳沢峠を越えたら多摩川の源流地域に入ります。この道を下っていったところが落合です。そこから多摩川の源流の笠取山を目指して登っていく道があるのですが、その道を登って、大切峠のかなり手前ですが、黒川鶏冠神社と言う神社があります。私が行きましたのは十三、四年前。ぼうぼうと雑草が生い茂って、本当に荒れた神社でした。おそるおそる神社の前に行って、拍手を打って、社殿の中を覗いたら、写真1の額がありました。中央には「奉納 金御幣」、右側には「大正十四年五月二十日」、左側には「岐阜県



写真1 黒川鶏冠山の社殿に掲げられた「金御幣」扁額

吉城郡坂下村幸野 東京市水源林事務所 東京市技師 中川金治」と書いてありました。これが私が初めて中川金治さんに出会った瞬間です。それまでは中川金治さんについては全然知らなかったのです。この額を見た時、金の御幣って一体何だ、なぜ紙でなく黄金でなければいけないのかと、それが頭に残ったのです。

黒川金山

それから十年あまりして、今から四、五年程前に、長老に頼んでこの金の御幣を見せて頂きました。それがこの写真2の手前のもので、後ろの円いのは「金の鏡」で鶏冠神社の神宝です。「金の鏡」はともかく、御幣の方はまさしく金だと思えました。持ってみるとずしっと重いのです。でもなぜ金でないといけないのか。その理由は、やはり黒川金山にあるのではないか。黒川金山は、柳沢峠から峠道を降りてきたところにあります。そ

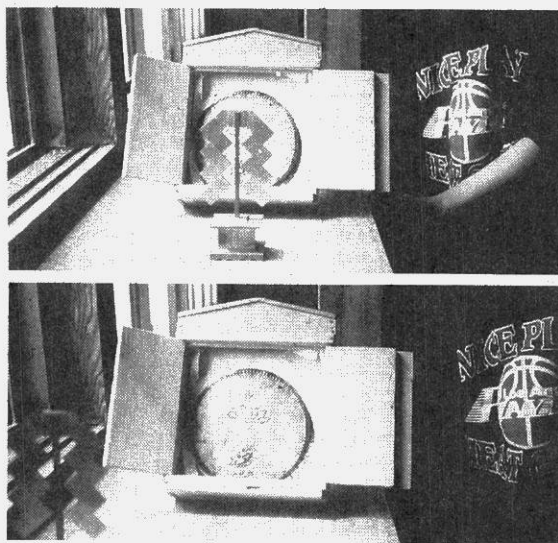


写真2 「金御幣」と「金の鏡」

の前に鶏冠山があつて、その頂上に祭られているのが鶏冠神社。その里宮が黒川鶏冠神社です。いずれにしても黒川金山というのは、もの凄く古い金山で、文永六年（一二六九）、ここは殷賑を極め、あまりに繁栄しているので、日蓮上人が布教に赴いたと言われています。

この金山が武田信玄の軍資金の源泉をなし、信玄が減んだ後、なお徳川家康の軍資金になった、そういう金山の一つでもあつたのです。家康の財政を支えた権臣、大久保長安が管理していて、一時は黒川千軒と言われるほど賑わつた、ということです。四代將軍家綱のころまで金が採掘されていたと言われます。鎌倉時代から四代將軍のころまでとなると四百年以上になります。

さしもの黒川金山も堀尽くされてしまったのでしよう。いつのことか、詳しくは分かりませんが、この金山を閉じる時に「おいらん淵」のいわれができます。おいらん淵の上の「銚子の滝」の

途中に縁台をしつらえて、黒川金山を去つて行くおいらん達が最後の宴を催したのです。その宴たけなわの時に、縁台を吊つてある綱を切つてしまつた。そこでおいらんはすべて溺死してしまつた。おそらく金山にかかわる秘密は極秘ですよ、秘中の秘です。だからこんな惨酷な措置がとられたのだと、私は思います。そういう風に書かれた解説はありませんけれど。

おいらん淵は、はかなくも哀れな女性の物語として残っている、しかもおいらん淵の前の山道は、「死者の霊が山頂に登つて行く道だ」と言われているのです。これはこういう事実と重ね合わせる面白。つまりアイヌの伝承では必ず死者の霊は、山頂からあの世に上るのです。しかも普通は地下のトンネルを通つて山頂に行きます。その山頂には必ず美しい泉、池、湖がなければいけない。そこでしばらく遊んでからあの世に上るのが、アイヌの伝承なのです。当時のことですから、地下

道でなくともいい。周囲は鬱蒼とした森林ですから、地下道のように見えるでしょう。そういう事実と重ね合わせると非常に面白いと思うのです。これは笠取山の頂上付近に美しい池または湖があったことを想像させます。事実、笠取山に行かれたら判りますが、頂上の手前は、すばらしい高山植物が咲き誇る高原です。あれは湖の一部がいつの時点かで決壊した跡だ、つまり湖底だった所だと、私は想像しています。

縄文的空間

それからアイヌの伝承を考えるとということ、この地域に縄文的な空間があるということ、この地域は地名にアイヌ語が残っていると考えられるところが、かなりあります。図1の「丹波天平」、これを例に説明します。これは私の解釈ではアイヌ語なのです。「天平」はこの地方では「デンデーロ」と読まれています。「デンデーロ」

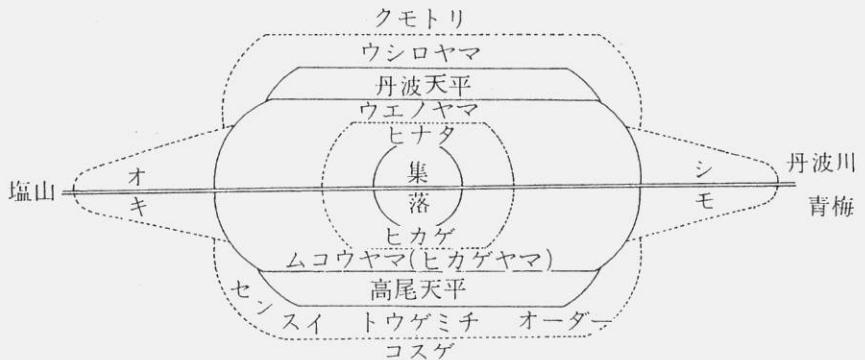


図1 丹波山村の模式図

たとえば、皆さん閃くものがあると思います。それは遠野市の「デンデラ野」です。「デンデーロ」と「デンデラ野」、凄く言葉が似ているでしょう。

アイヌ語では、「デ」というような濁音は使わない。日本語も昔の古語は、全部語頭は清音です。

ですからこれは「デンデーロ」ではなく「テンテロー」、「デンデラ野」ではなく「テンテラ野」なんです。そうするとこれは「テンタイラ（天平）」という言葉に通ずるのです。この「テンタイラ」というのをアイヌ語で解釈すると、「この森の低い所」という意味です。「この森の低い所」というのをどう解釈すればいいかということ、「村里に近い森の入口あたりの山の斜面」を意味するので、山の斜面があるでしょう。森がずうっと斜面に広がっている、里から山への出入口あたり、そこに立つと里が全部見えるのです。そういう意味で、ここは神の領域と人の領域が接する境界領域なのです。そこからは村里、つまりこの世がよく

見える。年老いた人々は自らの意志でその境界に登って、この世の幸せを祈りつつあの世に迎う日を待った。こういうように考えると「デンデラ野」の意味がはつきりして来るのです。遠野では「デンデラ野」というのは、姥捨ての場所です。

この丹波山の「天平」が、姥捨ての地であったかどうかは判りませんが、ここは「デンデーロ」と読ませているのですね。こういう風に「デンデーロ」をアイヌ語で解釈すると、それなりに意味がパツと出てくるわけでしょう。

つまり縄文の考え方が色濃くここに残っている。図2の左側は遠野の厄除けのわら人形です。右側はカドンドウシン、これはお正月などに丹波山村のお宅の玄関などに飾られる、やはり厄除けの人形です。この二つの表情を見て下さい。すっかり同じと言っているでしょう。あの遠野物語の遠野が、東京のついそこと言ってもいい所にある、そういう場所だということです。



▼カドンドウシン



図2 遠野市に伝わる厄除け藁人形と丹波山村のガトンドウシン

「小菅村郷土小誌」によりますと、このあたりからは縄文中期から後期、今から四千年位前の石器や土器が発見されていると言うのですから、このあたりは非常に古い所なのです。もう一つ、一寸ニュアンスが違うのですが、丹波山、丹波川の「丹波」、これはアイヌ語とは違うのですが、「庭（ニハ）」とも読めるんです。「庭」とは何の庭か、これは神の庭なのです。神の庭、即ち丹波川とは「神の庭を流れる川」という意味なのです。そういう事からすると、多摩川源流域とは神の庭を思わせる、異次元の世界だったのだと、こういう風に解釈出来る、そういう地域なのです。

こういう所に受け継がれた信仰というものは、沢山の地蔵尊によって判ります。写真3左側のような路傍の地蔵尊、右側は墓地にある三つ目の竜、この額の真ん中にある目は神の目です。地蔵尊は迷える大衆を救う菩薩であると言いう意味から考えると、アイヌ信仰と地蔵尊がこの地域で重なり

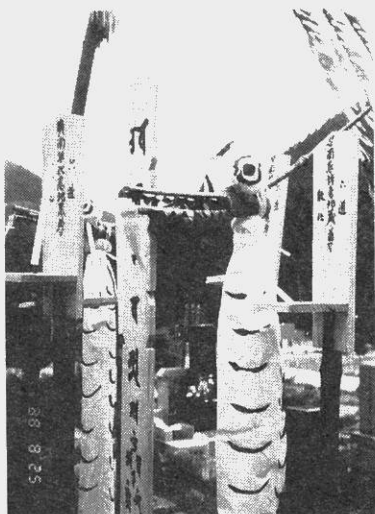
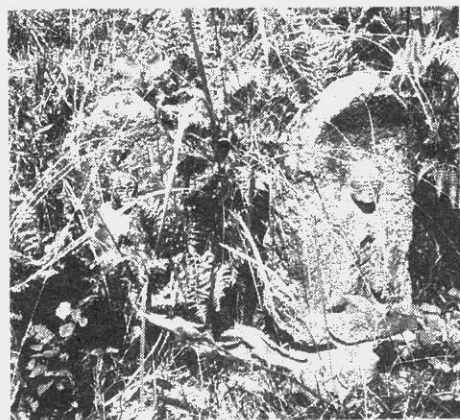


写真3 路傍の地藏尊と三つ目の龍の飾り

合って、生きていくということですが。

したがって死者の霊が山頂に向かって登っていく、その道ばたには沢山の地藏尊が手を差し伸べている、そういう所、異次元の世界、それが多摩川源流地域なのです。

山の御爺

この多摩川源流地域が荒廃していて、かつて百年前には裸の山に近かった。それを復元したのが、「山の御爺」と言われる中川金治さんです。中川金治さんの事を地元の古老に聞いてみると、こういう風に言います。「子供の頃、中川さんの後ろを『山の御爺、山の御爺』と言って、ついて回ったものです。大きな登山靴をはいていました。当時はとても珍しかった。東京に出られると、帰って来る日が待ち遠しくて、下流の方ばかり見ていたもんです、リュックは、いつも絵本や童話の本でいっぱい。それを一人ひとりに『良い子にな

れよ』と頭を撫でて、一冊づつ渡してくれるのですよ。」「中川さんがこの広大な水源林を造ったのです。厳しい山の親父でした。なにしろ『峠で休んではいかん。峠の手前で休め。そして休み終わったら一気に越えろ』と言うのです。『峠で休むと、景色を見てしまう』と言うのですね。本当に山の人たちのために働いてくれました。』

中川さんは山の写真を沢山撮影しています。写真4は、その一例です。

「暗箱を運ぶ手元の作業員は、『まるで親父のように山のことを教えてくれる』と、言っていました。中川さんは写真を綺麗な沢水で洗っていました。現像技術も優れていたようです。』

「中川の爺さんは、イタドリ虫が大好き。イタドリ虫というのは木を喰う虫です。非常に大きな虫だったようです。撮影を手伝った人の話だと、よくこのイタドリ虫を取って来てくれと言われたそうです。その虫を串に刺して焼いて食べる、そ

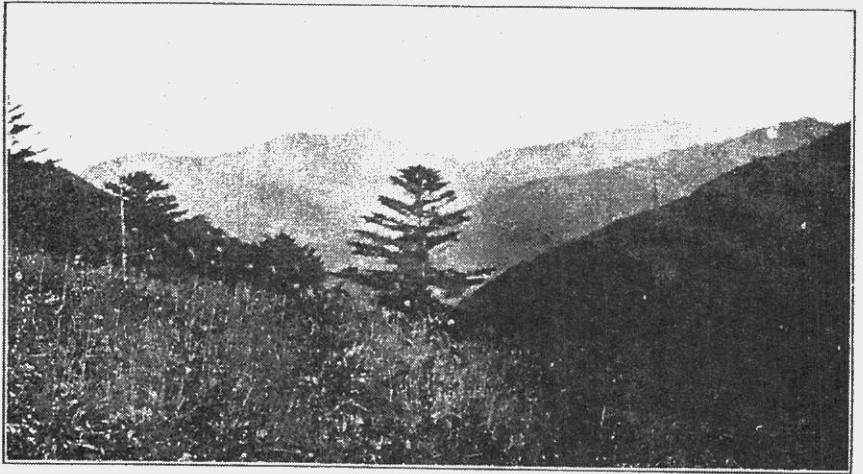


写真4 牛王院より雲取(右)、白岩(左)を望む(中川氏撮影)

うすると香りがよくてとても美味しい、本当の山の御爺でした。」

こうして丹波山村の人たちは中川さんに感謝して、サオラ峠に小さな祠を造り、中川神社と名付けて、お参りをしたというのです。サオラ峠というのは丹波天平（タバデンデーロ）の一角に位置しています。そこに至るには非常に急峻な斜面を登らねばならなかったのです。「サオラ」というのは「（垂直に立てた）竿の裏」と言う意味なのです。ですから非常に、急傾斜で登るのは容易ではない。その上に中川神社があるのです。写真5が中川神社です。スケッチは、その神社から見た景色で私が当時、描いたのです。富士山が大菩薩峠に連なる山並みの向こうに、山越の阿弥陀仏のように秀麗な姿を表している、これは実に見事な景色、そこに小さな祠の祭神「大山祇中川大人之命」として祭られているのです。「信徒百有余人これを維持す」と書いてありまして、発起人の

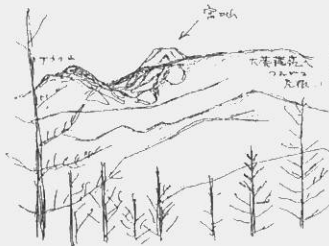


写真5 中川翁と中川神社／スケッチは中川神社から見た景色

中にはこの地方の「猟師代表」の肩書きのある人もおられました。

源流の荒廃とバルトン先生

重複しますが、こういう源流地域が非常な荒廃をしていたわけです。江戸幕府では、玉川上水が出来ましてから、この多摩川上流の森林の一部を「お止め山」として、伐採を禁じていたのです。

ところが明治時代になりまして新しい税金の制度を作ることになったわけです。もともと山というのは入会地、入会山です。山を使用することは自由に出来た。ですから税金は掛からない。ところが新しい税制の下では、山地も官地と民有地に分けて、民有地となった所は全部税金を掛けるということになったのです。そこでこの地域の人たちはお役人に言われたのです。「民有地にすると税金が掛かるぞ」と。そこで皆、今まで通り使えるものと思つて「これは民有地ではありません」と

いうことになってしまった。そうすると、これは国有地ですよ。そこで日本の広大な国有林が出来上がった。民有地になっていけば税金は取られませんが、自由にその樹木などを使うことは出来る。

ところが国有林となると、役所の許可が要るので。役所の許可なしに木を伐ると盗伐です。焼き畑の為に火を入れると放火ですよ。警官が来てひつくくる。そこで、ここらあたりの人達は山の民ではありますが、武田信玄につながる、しかも山に關係があつた人たちですから、このような横暴なやり方に非常に怒つて、その結果として盗伐が益々エスカレートしていくことになったのです。

そこへ幸運というか不運というか、青梅街道の整備で、明治十一年に柳沢峠新道が開通し、塩山から丹波山までの交通の便が一挙に良くなったのです。柳沢峠からの道(四一―号)が、それまで無かつた、あつたとしても非常に細い山道だったので。それが整備されて、非常に便利になつ

た。そうするとこの木を伐つて峠を越えて塩山まで運ぶと、おそらく相当な価格で売れたのでしよう。明治の近代化では、木材の需要はもの凄いものがあつて、家屋を建てるためにも、鉄道の枕木としてもどんどん必要だったので。ですから鬱蒼たる森林の木を、密かに夜陰にまぎれて伐つて、これを新しくできた青梅街道から柳沢峠を越えて塩山まで何がなんでも運び出す。そうすればその木が引く手あまた、どんどん売れたわけですよ。そこで明治二十年以降になると、この源流地域にめぼしい木は無くなつていったのです。

明治二十年にバルトン先生が来日して一番最初に買った大きな計画は首都東京の上水道計画を作ることです。バルトン先生は計画を作る時、踏査、現地を歩いてみることに、これをもつとも重視した人です。明治二十一年十月に奥多摩町まで調査してまわりました。その時もう一步山梨まで行っていればなお素晴らしかったのですが、当時は

まだそこまで行く必要はないような状態だったのでしようね。奥多摩までは緑したたる森林も続いている、これなら大丈夫だと。もちろん一寸大水がでると多摩川の水が濁るといふことはあつた。ですから多摩川の上流で何かが起こっているといふことは、知る人は知っていた。バルトン先生も、水道計画の提案の中で水源林の造成について提案しています。ですけども焦眉の急といふところまではいかない。ただ多摩川は特別の川だったので。なぜかといふと天皇陛下が飲む。玉川上水を通つてこの多摩川の水は皇居に入る、天皇の水でもあつた。ですからその源流地域が裸になるといふことは大変なことですから、いずれは水源林を造らねばならん、という提案はしていたのです。

水源林経営

ところが明治二十一年から十年も経たない内に、

多摩川源流域の状況は一日も放置できないことがハッキリしてきた。明治三十年はじめ、先ほど言いました東京府知事の千家尊福（たかとみ）と
言う人が何とかしなければいけないと、いうことで東京帝国大学農科大学教授の本多静六に調査を委嘱した。その結果、「一日も猶予は許されない。水源林の経営を始めるべきだ」ということで明治三三年に水源林経営の決意を固めることになったのです。そして明治三四年に千家知事が宮内省と協議して丹波山、小菅、奥多摩の御料林を水源林として譲り受けた。その時から今年で百年なのです。その時はまだ東京都の水源林の管理事務所はなかった。水源林を管理する事務所が出来るのはこれから更に十年位後なのです。

ともかく千家知事の努力で、水源林を守る具体的な第一歩を踏み出したということです。ところが、丹波山、小菅、奥多摩まで、まだ塩山が入っていないかった。そこで塩山を入れる努力をした

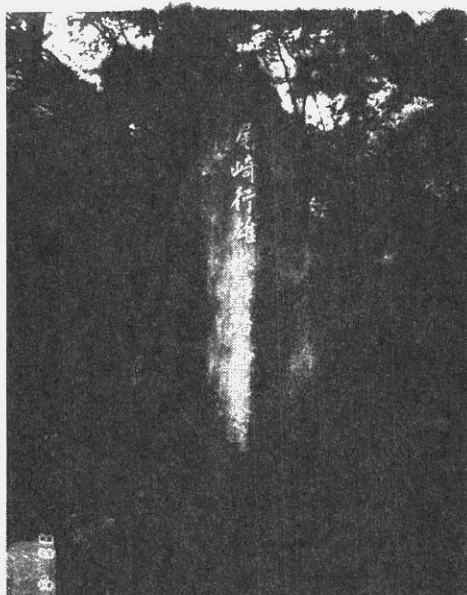


写真6

尾崎行雄水源踏査記念碑

のが尾崎行雄さん——明治三七年から大正元年までの東京市長——です。尾崎さんが丹波山の更に上流まで足を延ばした時の記念碑が写真6です。こういうことで千家、本多、尾崎という政治家、学者によって、大きな枠組みは出来たのですが、現実の山を本当の意味で蘇らせる必要があった。

ところが、この蘇らせるということは並大抵のことではない。なぜかと言うと、水源林の骨格は形成されましたが、現実の森林は荒廃していて、水源林の機能は失っていました。この機能を蘇生させた人が中川金治だったのです。この仕事は、深い山中で孤独と戦いつつ山村の人々と共に地道に忍耐強く進める必要があります、したがって学者や政治家では到底出来ない仕事です。本当に縁の下力持ちですよ。骨格は出来たけれど、じゃあどうするのだ。本多静六は最適任の人を見つけました。当時、農科大学の篤志林業夫ということで、

林業試験所の林業夫をしていた人——「篤志」ですから手弁当でやっていた——その中に中川金治という人がいる。この人ならやる筈だ。中川金治という人は、明治七年（一八七四）四月に岐阜県宮川村という所に生まれた。この当時、坂下村と言っていたのですが、近所で何うと江戸時代に坂下村で苗字帯刀を許されたのは、この中川家しかなかったという名家です。しかも飛騨の山林経営というのは、幕府の直轄ですから、代々山林の維持を果たしてきた家柄でもあります。したがって中川金治と言う人は生まれながらの林業家だったのです。しかも多くの作業員を統率出来る能力を持っていた。

なぜ飛騨の山中から東京に来たのか、よく判りませんが、明治の初めに岐阜では梅村一揆というのが吹き荒れたのです、梅村という人は当時の岐阜高山の知事です。非常な悪政をした人らしいのですが、中川家は苗字帯刀を許された大金持ち、

体制派と思われたのです。そこで農民つまり一揆勢が中川家を襲ったのです。

写真7は中川さんの実家ですが、仏壇の上の欄間には刀傷があるとされているのです。それがその一揆衆が暴れ込んだ印だと。また大金持ちだと言われているのは、富山藩の藩主から、色々な財政的な援助をしてくれたお礼の金の茶釜があると言うのです。非常に由緒のある家なのですが、この梅村一揆を境に家運が傾いていく。そこで何とかしようと思つて上京したのじゃないかと思えます。

中川金治さんは、明治三四年、二七歳で上京して篤志林業夫として帝国大学の今の農学部 of 林業試験所に勤務する。働きながら学びたいと言う気持ちだったのでしよう。その中川さんは本多さんから頼まれて、明治三五年に多摩川源流地域に乗り込み、それから三三年間、単身山中にこもつて水源林造成に全精力を傾けたのですね。中川さ

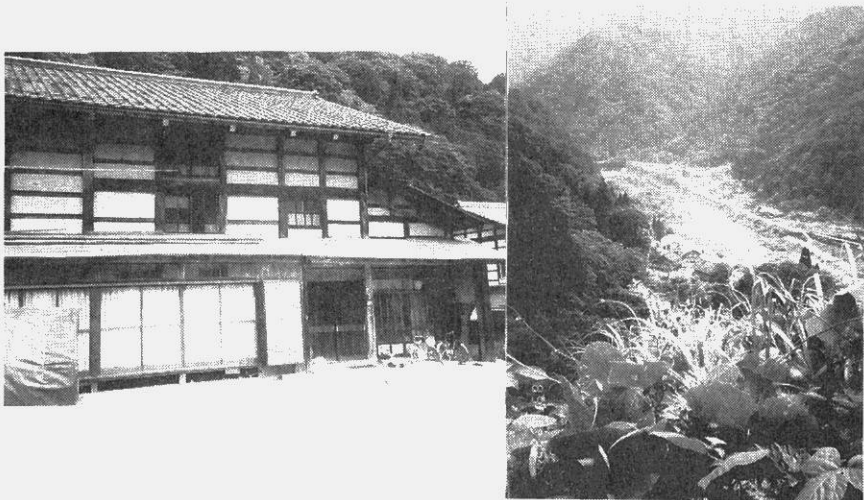


写真7 岐阜県宮川村の中川家

んは不思議なことに誰にも自分のことは言ったことがないのです。したがって村の人たちは「あの人は独り身で大金持ちの御曹司なのだ。山好きがこうじて、こんな山奥に来たに違いない」と噂しておりまして。非常に不思議な人として知られていたのです。

いずれにせよ三三年間、水源林を造ることに精魂を傾けて戦争前に故郷に戻ります。ところが皮肉なことであれほど子供達に慕われた中川金治さんが「気むずかしい人。子供などそばにも寄れない人」という印象を周囲に与えていたといいます。これはなぜでしょう。昭和二十年にお亡くなりになったのですが、あれほど多摩川源流地域の人々から慕われたその様子と地元に残された印象とは正反対です。これには感無量のものがあります。

中川金治さんがやった森林の造成とはどんなものだったのか。森林は、成長した後々までを見

通した長期にわたる周到で、緻密な配慮の下に設計されているもの、水源林というものはそういうものです。庭園の設計、造園などとは全く違って、人目にも触れない。それでも後々までを配慮して造るものですから、非常に難しいのです。中川金治さんが精魂傾けて造った水源林について、地元の曾根良一さんは、——六十歳位の人ですが——

「第一に、中川さんによって山道と防火帯が造られた。当時、系統的な山道や防火帯はなかった。防火帯は延焼を防ぐため、尾根筋に広い草場を設ける。だから中川さんは尾根筋に十五メートル位の幅の草場を設け防火帯とし、また山道を設けた。第二にどういふ樹種の木が、どういふ場所に適しているか、いわば適材適所に徹した植樹をした。しかも崩壊しそうな所、山腹が崩れそうな所には、その後の修復に必要な樹種の木をあらかじめ残す。つまり松なら松を残す。山腹が崩れる、あるいは川が氾濫する、そうすると松は強く水にも耐

える、ですからそういう木はあらかじめ残すという事です。中川さんの造られた河川の堰堤、谷留工、崩壊地の山腹工事などでは壊れたものは、自分の知る限り一つもない。」と言うのです。

第三に、多摩川源流の水干に水神様を奉った。笠取山の直下流に水干というのがありますが、そこに石の祠があります。それは中川さんが持ち上げたものです。それから五月二一日に地元でお祭りを催して、楽しく仕事が出来るといふ体制をつくった。第四に地名を持つ岩、いわれのある岩、地域で山の神と言われている木、そういうものは全部残させた。おかげで破壊を免れた所も一杯ある」と言われております。

曾根さんは、「林業というのは、長い時間の必要な仕事です。山を愛し、少なくとも二十年以上に亘って一カ所で仕事をするのが真の林業家です。中川さんは、自分の故郷、飛騨の山をこの多摩川源流に置き換えて、頑張られたのでしょう」

と言っておられます。こういうように林業というのは長いタームで仕事をするものです。二十、三十、五十年先の木の姿、森林の姿を頭に描いて進めていく仕事です。今が良ければいい、というのは全然違います。一瞬々々、微分的に今の一瞬だけを考えるのではなく、長いタームで、ものごとを積分的に考える、こういう考え方が中川さんの考え方だった。そういう考えに基づいて水源林を造った、そういう意味で今という時代に非常に重要な示唆を与えてくれていると思います。

源流地域の現在と未来

最後に源流地域の現在と未来ですが、源流地域は人口が減少し、産業振興もままなりません。衰勢に向かっているとと言っても誤りではありません。ん。

今から十一年前、日本下水文化研究会では、源流地域の振興を是非やらなければいけないと考

えまして、誰から頼まれたわけでもありませんが、源流の丹波山村、小菅村、奥多摩町などに働きかけまして「多摩源流の森と水を守るシンポジウム」を平成二年（一九九〇）五月四日、開催いたしました。

そこで「多摩源流の森と水を守る宣言」という五項目の宣言を出しました。

■ 第一に、多摩源流地域は、多摩川に残された真の多摩川であり、貴重な自然である。

■ 第二に、多摩源流の豊かな森、清冽な水の保全と源流地域の振興とは両立するものでなければならぬ。源流地域の人達が生活して行けなければ、どうしようもない訳です。源流地域の彼らがそれなりに幸せに生活して行ける、それと水が守られる、これが両立しなければ意味がないのです。

■ 第三に、多摩源流地域は行政境界に関わらず、一体で、保全と振興に相互に協力する。つま

り東京の人から見れば多摩川は基本的に奥多摩までなのです。その上に東京の水源地が広がっている、しかもそこは山梨県なのです。しかし広大な土地の相当部分は東京都の土地です。だから行政地域に関わらず、東京都と山梨県は、源流地域の保全と振興に協力する必要があります。

■ 第四に、多摩川下流の人々に源流地域への帰属意識を持って貰うため、様々な企画を実施する努力を続ける。この第四は、上流の丹波山や小菅の人たちだけが言っていることです。源流地域の大切さを知って貰うためにこれからも努力を続けると、言っているのです。

■ 第五に、多摩川下流の人々が「流域は一体」の立場を理解し、源流地域が果たしている機能や役割の活用を積極的に進められることを願う。東京都の人たちに「判って下さい、

協力して下さい、私たちのことを忘れないで下さい」と言っているのです。

そういう意味でこの宣言文には、源流の人々の願いが悲しいままでに込められていると言っていると思います。本当に源流の人たちの率直な気持ちですね。そこには悲しいまでの下流への思いが込められていると思います。

この宣言を出した一九九〇年から十一年経って、小菅村に「多摩川源流研究所」が創設されました。この(壁に貼った)「源流古道 体験の旅」のポスター。これは雲取山―飛竜山―承監峠―笠取山―柳沢峠―大菩薩嶺、二千メートル級のこれらの素晴らしい山を一週間かけて歩いて見よう、というのが、多摩川源流研究所の最初のプロジェクトです。このような絶ゆまぬ努力が、宣言文を出してから研究所が出来るまでの十一年間、続けられてきたのです。そして現に今も続けられています。そこに「悠久に生きる」というバルトン先

生の精神が息づいています。中川金治さんも、同じ意味で埋もれさせてはいけないうのじやありませんか。

バルトン先生だってそうです。一お雇い外国人だったのです。上水道、下水道と言えば長与専斎とか後藤新平とか、有名な人たちがおります。しかし、バルトン先生は、本当の技術に徹して、営々と努力をされた。バルトン先生のような人たちの生き方を私達は「悠久に生きる精神」といっているのです。中川金治さんもその一人——誰からも評価されようなどと思つたこともない人——です。

そういう精神が輝きを失わない限り、源流地域の未来は必ず明るいものになると信じています。

私の話は、これで閉じたいと思います。ご清聴ありがとうございました。